

重紐をめぐる幾つかの問題(6)

—舌音の帰属—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

中村：前回の議論では、論文三根谷徹(1953)に展開される、重紐の別を声母の別とする“音韻論的解釈”(三根谷説(/k:kj/等))は、少なくとも三根谷徹(1953)それ自体に依る限り成立しない、という結論になりました。三根谷説の出発点は、舌音(知組声母および来母三等)は、重紐A類とB類の中間的(三根谷氏は“中性的”とする。中性的とする表現自体に問題が含まれるが今は詳述しない)であるとする認識にあるので、まずは、粗雑な統計に依った三根谷徹(1953)から離れて、中間的(“中性的”)とする認識が適当であるのか否かについて議論する必要があります。

吉池：三根谷氏は、なぜ舌音(来母と知組)は、A類としてもB類としても振る舞うように見えるのか、そのこと自体の解明には進まず、その問題を棚上げして、声母の別であるとの“音韻論的解釈”により議論をすすめたわけですね。

中村：いわゆる“音韻論的解釈”の名のもとに、事実を精査することなく、体系の綺麗さを求めたと言わざるを得ません。

吉池：今回は、前回問題となった舌音(来母と知組)の帰属について議論したいと思います。舌音は、重紐A類とB類の中間的性質を持つものなのか(かりに“舌音中間説”と呼ぶことにします)、それともA類なのか(“舌音A類説”)、それともB類なのか(“舌音B類説”)、そのいずれかということ議論するわけですね。

中村：“舌音中間説”は重紐の別を声母の別とする説の前提となります。もっとも、仮に舌音中間説が成立するとして、直ちに重紐を声母の別とするわけにはいきません。舌音中間説と声母の別とする説を無理なく繋ぐ説明が必要となります。他方の“舌音A類説”と“舌音B類説”は、重紐を介音の別とする説を前提としていると見ることができます。

吉池：先ずそれぞれの説を代表する三つの文献を挙げて検討することから始めませんか。このように言うと、おまえの挙げる三文献が代表であるとする根拠は何かと詰め寄られそうですが、そこは主観によるということでご容赦願います。

中村：どのような文献を挙げるのでしょうか。

吉池：舌音中間説については平山久雄(1991)¹を、舌音A類説については中村雅之(1992)²を、舌音B類説については森博達(1983)³を挙げたいと思います。議論の順番はどのようにしましょうか。

中村：森博達(1983)、平山久雄(1991)、中村雅之(1992)の順でどうでしょうか。発行年順ということになります。

吉池：それでは森博達(1983)から検討しましょう。

2. 森博達(1983)の舌音B類説

中村：重紐韻の反切上字には、C類字、A類字、B類字が来る場合があります。まれに直音字が上字になることもあります。そこに舌音字は関わらないので、今は無視することになります。森博達(1983)は、C類上字+諸声母の下字という音節を検討したもので、諸声母すなわち来_三、舌_三、齒_三、齒_四、日_三の出現頻度を調査し表示します。調査の対照となる資料は、原本玉篇、玄應音義、完本王韻、廣韻の四種です。

吉池：完本王韻と重紐韻について森氏は次のように述べます。

「平山 1977 が用いた李榮 1956 (切韻音系) の「單字音表」に拠って、まず、上字C類・下字〈来〉母(C+来_三)となっている重紐反切を掲示すると、〈表Ⅱ・1〉(帰字A類)および〈表Ⅱ・2〉(帰字B類)の如くである。ただし、重紐反切とは、〔支〕・〔脂〕・〔祭〕・〔眞〕・〔仙〕・〔宵〕・〔庚_三〕・〔清〕・〔幽〕・〔侵〕・〔鹽〕・〔蒸〕の諸韻(相配する上・去・入声韻を含む)の唇・牙・喉音(〈曉〉母と〈影〉母のみ)音節を帰字とする反切を指す。」(317頁)

李榮氏の『切韻音系』には旧版 1952 と新版 1956 がありますが、新版 1956 に拠ったとのこと。私の手元には、新版 1956 は無く、旧版の李榮(1952)『切韻音系』⁴と、『瀛涯

¹ 平山久雄(1991)「中古漢語における重紐韻介音の音価について」『東洋文化研究所紀要』第114冊、1-41頁。

² 中村雅之(1992)「中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって」『富山大学人文学部紀要』18、89-104頁。『中古音のはなし—概説と論考』所収、古代文字資料館、2007。

³ 森博達(1983)「中古重紐韻舌齒音字の帰類」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学中国文学論集』、東方書店。いま森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店 315-330頁所収による。

⁴ 李榮(1952)『切韻音系』(語言學專刊第四種)中國科學院印行。

敦煌韻輯 附切韻音系』(1972)に付された『切韻音系』しかありません。後者の『切韻音系』は新版1956と同じと見て良いのではないかと思うので「新版1956」と見なして議論を進めます。旧版1952には、被切字と反切の誤記誤植が少ないのですが、「新版1956」では訂正されています。旧版・「新版」共に、庚_三・清・幽・蒸の諸韻に重紐を認めていません。森博達(1983)は庚_三・清・幽・蒸の諸韻に重紐を認めるので、「新版1956」の「單字音表」にそのまま扱ったわけではありません。それをまとめたものとして表Ⅷが提示されているので次に引用します。引用に当って、森博達(1983)の数字をそのまま受け入れたとしてどのような議論が可能かという立場で議論を進めたいのですがいかがでしょう。

中村：それでけっこうです。森博達(1983)の舌音B類説の問題点については、平山久雄(1991)が議論しているので、それを引用すれば良いでしょう。

吉池：なお、原表には表Ⅷと有りますが、ここでは表1として提示します。それぞれの例数の右側に、参考までにパーセント(%)を付しました。ここに付した%は、各資料の来_三舌_三、および齒_三齒_四日_三のA類とB類の割合を示すもので、原表にはありません。

表1

資料 反切 婦字	原本玉篇		玄應音義		完本王韻		廣韻	
	A類	B類	A類	B類	A類	B類	A類	B類
C + 来 _三	17%	14 ₉₃ %	314%	18 ₈₆ %	8 ₂₆ %	23 ₇₄ %	5 ₂₃ %	17 ₇₇ %
C + 舌 _三	0 ₀ %	9 ₁₀₀ %	0 ₀ %	8 ₁₀₀ %	3 ₂₅ %	9 ₇₅ %	4 ₃₃ %	8 ₆₇ %
計	14%	23 ₉₆ %	3 ₁₀ %	26 ₉₀ %	11 ₂₆ %	32 ₇₄ %	9 ₂₆ %	25 ₇₄ %
C + 齒 _三	16 ₁₀₀ %	0 ₀ %	23 ₉₆ %	14%	16 ₇₃ %	6 ₂₇ %	13 ₇₆ %	4 ₂₄ %
C + 齒 _四	1 ₃₃ %	2 ₆₇ %	7 ₈₈ %	1 ₁₂ %	13 ₉₃ %	1 ₇ %	11 ₁₀₀ %	0 ₀ %
C + 日 _三	3 ₁₀₀ %	0 ₀ %	10 ₁₀₀ %	0 ₀ %	3 ₇₅ %	1 ₂₅ %	2 ₆₇ %	1 ₃₃ %
計	20 ₉₁ %	2 ₉ %	40 ₉₅ %	2 ₅ %	32 ₈₀ %	8 ₂₀ %	26 ₈₄ %	5 ₁₆ %

*原本玉篇と玄應音義には、例えばB類婦字の下字C+来_三の挙例を見ると、級：居立、急：居立のように反切が同じものが有る。森博達(1983)によると、この表の統計からは、そのようなものは除いたとのことである。

中村：原本玉篇・玄應音義と、切韻系韻書の完本王韻・廣韻とでは数字の傾向に異なりがありますね。

原本玉篇・玄應音義と完本王韻・廣韻

吉池：C+舌音(来_三・舌_三)がA類になるものは原本玉篇で4%、玄應音義で10%、そしてB類になるものは原本玉篇で96%、玄應音義で90%です。舌音声母の音節はB類と関係がある

と見るのが自然でしょう。他方の完本王韻と廣韻においては、C+舌音（来_三・舌_三）がA類になるものとともに26%、B類になるものとともに74%です。比率は異なりますが、やはりまず、舌音はB類と関係があると推定していいのでしょうか。

中村：問題は、切韻系韻書の完本王韻・廣韻において、C+舌音がA類になる例が、原本玉篇・玄應音義と比べてだいぶ多く、26%となっています。このことをどのように見るかということです。原本玉篇・玄應音義と完本王韻・廣韻は、資料として質が異なります。単純に比較をすることはできません。そもそも何故このような傾向の違いが出るのか検討する必要があります。しかしそれは容易な事ではないでしょう。今は後の課題とするしかありません。

切韻系韻書である完本王韻・廣韻の数字、特に完本王韻の数字によって舌音の帰属の問題を検討するというのが筋でしょう。森博達(1983)は、舌音（来_三と舌_三）を「B類に近い性質を持っていた」（329頁）とします。しかし上に示した表1よれば、完本王韻では、C+舌音（来_三と舌_三）は、A類11、B類32です。ほぼ四分の一がA類被切字に出現します。このことについて納得のいく説明が必要です。

C+舌音がA類となる事例の説明について

吉池：森博達(1983)は、C+舌音（来_三と舌_三）がA類となる事例について、次の1,2,3の説明があり、問題となりそうです。順に検討しましょう。

1. 「〈表Ⅱ・1〉および〈表Ⅱ・2〉に拠って統計を示せば、〈表Ⅱ・3〉の如くである【表Ⅱは完本王韻の統計である：対談者】。

〈表Ⅱ・3〉

反切	帰字声母	唇音	牙喉音	計
	C+来 _三 →A	5	3	8
	C+来 _三 →B	1	22	23

すなわち、平山1977はC+来_三→Aが牙喉音では6例あるというが（本稿〈表Ⅰ〉参照）、私の調査では3例となっている。唇音反切でこそA類対B類が5例対1例となりA類が優勢であるが、牙喉音反切では3例対22例となりB類が優勢を占めることは明白である。」（318頁）

中村：〈表Ⅱ・3〉は、表1には計として8と23しか出ていないものを、唇音声母と牙喉音声母に分けた表です。誰が見ても、このままでは首をかしげざるを得ません。牙喉音では、たしかに来_三はB類に多く用いられています。しかし唇音では、来_三は明らかにA類と関係が深い。この矛盾について、平山久雄(1991)は、「唇音の状況をことさらに軽視するかのよ

うである。」(15頁)とするわけですが、その通りでしょう。二つ目の説明の問題点はどのようなものでしょう。

吉池：二つ目は次のとおりです。

2. 「〈表Ⅲ・1〉および〈Ⅲ・2〉に拠って統計を示せば、〈表Ⅲ・3〉の如くである【表Ⅲは完本王韻の統計である：対談者】。

〈表Ⅲ・3〉

反切 / 帰字声母	唇音	牙喉音	計
C + 舌 _三 → A	0	3	3
C + 舌 _三 → B	0	9	9

すなわち、C + 舌_三の重紐反切には唇音反切の例が無く、牙喉音反切ではA類対B類が3例対9例となり、やはりB類が優勢となっていることがわかる。A類反切3例のうち、②の「麴 丘召反」と③の「駟 牛召反」はともに「召」字を反切下字としているが、「召」字は舌上音(澄)母(小韻首字)と正歯音三等(常)母の二音がある。もしも(常)母の方を採ったものであれば、この2例は除外されることになり、C + 舌_三 → Aはわずか1例のみとなる。」(318頁)

中村：二つある反切のうち、「もしも(常)母の方を採ったものであれば、この2例は除外されることになり」とあります。かなり希望的な観測です。平山久雄(1991)は「召」の二音のうち、章組常母の音は、広韻のみに見えるもので、広韻以前の切韻系韻書にはないとします(14頁)。つまり、「牛召反」における「召」は知組澄母と見なすのが妥当ということです。A類が3例25%、B類が9例75%ですが、舌音B類説に立つならば25%のA類が出る理由を説明する必要があります。三つ目の説明の問題点はどのようなものでしょう。

吉池：三つ目は次のとおりです。

3. 「以上、唇音反切を除けば、C + 来_三とC + 舌_三の重紐反切がともにB類帰字を導く傾向が顕著であることがわかった。例外については、誤字または韻図の誤りと看なして処理すべき可能性のあるものもある。たとえば、〈表Ⅱ・1〉の①「牝 扶履反」②「癸 居誅反」⑤「便 房連反」⑦「滅 亡列反」および〈表Ⅲ・1〉の①「企 去智反」は『廣韻』でも同一の反切であり、辻本1954はこれらの字形を誤りと看なし、それぞれ、「扶死切」【字に付された 圏点(○)を下線で記す：対談者。以下同様】または「便履切」、「吉誅切」または「居揆切」、「房廷切」、「民列切」、「兪智切」と改めることによって例外を処理している。また、〈表Ⅱ・1〉の⑧「子 居列反」(『廣韻』も同一反切)は、『玄應音義』では「居列反」の他に「居折反」(下字は(常)母)がある。『韻鏡』などがこれを四等すなわちA類に置いたのは、後者の音を採ったからではないかと推測できる。」(318-320頁)

中村：自説にとって都合の悪い反切を、必ずしも自明でない根拠によって、次々と例外とするのはいかがなものでしょう。表 1 によると、完本王韻の C+舌音（来_三・舌_三）が A 類になる例は 11 例 26%、B 類になる例は 32 例 74%です。この数字によって舌音が B 類と関係の深いことを主張することは可能ですが、舌音 B 類説を成立させるためには、11 例 26%を例外とする納得のゆく説明をする必要があります。また〈表 II・3〉の被切字（帛字）の声母が唇音の場合、C+来_三→A が 5 例、C+来_三→B が 1 例で、舌音 B 類説では説明できません。この点も納得のゆく説明が必要です。

辻本 1954 は例外を誤字等と解釈して説明をしようとしているように見えますが、成功しているとは思えません。森博達(1983)はその説明を放棄しているようにみえるのですが、いかがでしょう。

吉池：森氏がどのように考えていたか論文から読み取ることはできません。私自身は次のように考えています。切韻系韻書は、想定される原本切韻から廣韻まで、多くの手が加えられて成立しています。手を加える人の方言が異なることにより A 類と B 類の判定が異なる場合があるでしょう。例えば、宋代成書の廣韻は岐を B 類とします。「切二」「王二」「王三」は A 類と B 類の二種を挙げます。廣韻で一方を削ったように見えるのは何故か。あるいは原本切韻の系統により B 類一種としたのかも知れません。この点については、「切一」「切三」は該当する部分を欠くので原本切韻でどの様であったか確言することはできません。また、既に重紐そのものが無い人の手に拠る改訂が加えられているかもしれません。したがって私は、説明が困難な例外が有っても不思議は無いと考えています。全体の傾向がどのようであるか、そこが大事なのではないのでしょうか。

原本玉篇・玄應音義が、完本王韻・廣韻と比べて、ばらつきが少ないのは、手が加えられた数が少なく、比較的純粋な形を保っているためと見る事もできます。

中村：私自身はそのような想定には賛同できませんが、吉池さんの考え方については了解しました。

3. 平山久雄(1991)

吉池：平山久雄(1991)は、上田正(1975)の推定した原本『切韻』により、被切字と反切下字を対応させ、下字の使用数のパーセントと、使用数の実数の表を出しています。この表は、三根谷徹(1953)の出した表とは異なり、信頼の置けるもののようです。平山久雄(1991)は、その表の数値により、舌音（来母と知組）を“中間的”と結論し、重紐の別を、声母の別と解釈（三根谷説（/k:kj/等））して、声母と韻母の一覧表を出します。なお、原表には〈表 4〉と有りますが、ここでは表 2 として提示します。

表 2 (左は百分率、右括弧内は例数)

下字 被切字	幫 _A 組	見 _A 組	章組	精組	知組	来組	莊組	幫 _B 組	見 _B 組	合計
幫 _A 組	21(8)	3(1)	44(17)	13(5)		18(7)			3(1)	100(39)
	25(7)	11(3)	29(8)	7(2)	4(1)	18(5)			7(2)	100(28)
見 _A 組	6(4)	18(13)	61(44)	8(6)	3(2)	4(3)				100(72)
	10(1)	30(3)	30(3)	20(2)		10(1)				100(10)
幫 _B 組			3(1)			8(3)		57(21)	32(12)	100(37)
		4(1)			4(1)	8(2)	4(1)	35(9)	46(12)	100(26)
見 _B 組			3(5)	1(1)	7(11)	15(23)		7(11)	66(98)	100(149)
			6(2)	6(2)	3(1)	15(5)		18(6)	52(17)	100(33)
知 組			36(38)	8(8)	15(16)	33(35)			8(8)	100(105)
来 母		3(1)	44(17)	15(6)	18(7)				21(8)	100(39)
精 組	1(2)	2(4)	41(69)	34(57)	4(6)	13(22)			4(7)	100(167)
莊 組		2(1)	10(5)	2(1)	6(3)	24(12)	18(9)	2(1)	36(18)	100(50)
章 組		3(6)	73(167)	6(14)	3(7)	11(26)			4(8)	100(228)

*被切字の幫_A組と見_A組の下字数は、平山久雄(1991)の本文に在る〈表 1-1〉によるもの。

*被切字の幫_B組と見_B組の下字数は、平山久雄(1991)の本文に在る〈表 2-1〉によるもの。

*被切字の知組・来母・精組・莊組・章組の下字数は、平山久雄(1991)の本文に在る〈表 3-1〉によるもの。

*点線の上段は平山氏の第一式反切。第一式反切は反切上字にC類および「匹」を用いたもの。匹は本来A類であるがA・B・C類いずれの被切字にも用いる。

*点線の下段は平山氏の第二式反切。第二式反切は反切上字にA類・B類を用いたもの。

中村：右上灰色の網掛けは何でしょう。

吉池：見_A組の下字数を表わした網掛けの部分ですね。これは平山久雄(1991)の〈表 1-1〉にありません。したがって根拠が分からない数字ということになります⁵。

⁵ 表の問題は、表 2 (平山の〈表 4〉) だけではなく、表 2 の基となった「〈表 1-1〉 A類反切・下字声母分布表」(20 頁) にもある。下字の上段と下段(以下、上、下と略称する)の計の数を→のように訂正する必要がある。並_Aの計の上 2 下 5→上 4 下 3、章の計の上 16 下 5→上 17 下 4、羊の計の上 33 下 3→上 34 下 2、心の計の上 6 下 4→上 7 下 3、疑の計の上 0 下 3→上 1 下 2。これは計のみの誤であり、表の中身は間違いなく表 2 (平山の〈表 4〉) に反映されている。

中村：おそらく平山氏は手元に細密な表を持っており、それによってコンパクトな上記表2（平山の〈表4〉）を作成した。その作成の過程で抜け落ちてしまったということなのでしょう。

上段は第一式反切（反切上字C類および「匹」）で、反切下字見_B組の1例ですから、譬：匹義反を指し、下段は第二式反切（反切上字幫_A組）で、反切下字見_B組の2例ですから、避：婢義反と譬：卑義反を指すのだと思います。

吉池：平山氏は、この表の百分率により、来母・知組がA類とB類の間であるとします。被切字（幫_A組・見_A組・幫_B組・見_B組・諸声母）の反切下字を、幫_A組・見_A組・諸声母・幫_B組・見_B組の別に分けて、その総量における百分率を示したのが表2です。その内、来母と知組の占める百分率を抜き出したものを平山氏は次のように挙げます。なお網掛けは対談者による。

●来母について

被切字	百分率	被切字	百分率
幫 _A 組第一式（上段）	18%	幫 _B 組第一式（上段）	8%
見 _A 組第一式（上段）	4%	見 _B 組第一式（上段）	15%
幫 _A 組第二式（下段）	18%	幫 _B 組第二式（下段）	8%
見 _A 組第二式（下段）	10%	見 _B 組第二式（下段）	15%

●知組について

被切字	百分率	被切字	百分率
幫 _A 組第一式（上段）	0%	幫 _B 組第一式（上段）	0%
見 _A 組第一式（上段）	3%	見 _B 組第一式（上段）	7%
幫 _A 組第二式（下段）	4%	幫 _B 組第二式（下段）	4%
見 _A 組第二式（下段）	0%	見 _B 組第二式（下段）	3%

平山氏は、水色の網掛け部分の百分率がやや高いことより、来母は幫_A組と見_B組に音声的に近く、幫_B組と見_A組とは音声的にやや遠かったとします。知組については百分率が低く例数が少ないので積極的な推論を下すことは難しいとしながらも、来母と同様に知組も、幫_A組と見_B組にやや近かったと仮定することができるとします。

中村：このような百分率の多・寡が、音声の近・遠あらかずものかどうか腑に落ちません。

吉池：たしかに実感がともなわず、漠然とした感じがあります。そこで、A類的とされる章組と精組、B類的とされる荘組の百分率を表2から抜き出して見ました。

●章組について

被切字	百分率	被切字	百分率
幫 _A 組第一式（上段）	44%	幫 _B 組第一式（上段）	3%
見 _A 組第一式（上段）	61%	見 _B 組第一式（上段）	3%
幫 _A 組第二式（下段）	29%	幫 _B 組第二式（下段）	0%
見 _A 組第二式（下段）	30%	見 _B 組第二式（下段）	6%

●精組について

被切字	百分率	被切字	百分率
幫 _A 組第一式（上段）	13%	幫 _B 組第一式（上段）	0%
見 _A 組第一式（上段）	8%	見 _B 組第一式（上段）	1%
幫 _A 組第二式（下段）	7%	幫 _B 組第二式（下段）	0%
見 _A 組第二式（下段）	20%	見 _B 組第二式（下段）	6%

●荘組について

被切字	百分率	被切字	百分率
幫 _A 組第一式（上段）	0%	幫 _B 組第一式（上段）	0%
見 _A 組第一式（上段）	0%	見 _B 組第一式（上段）	0%
幫 _A 組第二式（下段）	0%	幫 _B 組第二式（下段）	4%
見 _A 組第二式（下段）	0%	見 _B 組第二式（下段）	0%

中村：A類被切字が章組と精組を反切下字に多く使用するの明らかですから、章組と精組がA類的とされることと矛盾しません。荘組については、反切下字の使用が極端に少ないので百分率は有効ではありません。しかし、幫_B組被切字に4%使用されることから見てB類的と判断して特段の矛盾はありません。章組・精組・荘組に比べると、来母・知組はときにA類的、ときにB類的であり、中間的と称しても良いのでしょうか。しかも、来母・知組は、幫_A組と見_B組にやや近かったと仮定して大過ありません。

ところで、平山氏自身は来母・知組が中間的であると明言しているのでしょうか。

吉池：平山氏は、上に出した来母と知組の百分率を提示して、来母・知組は幫_A組と見_B組に音声的にやや近かったとし、さらに来母と知組被切字の反切下字により、下記のように中間的であると明言します。

・「来母A B類反切はA類系の章組下字をとる比率が大きく、その点で精組A B類反切と似た状況にある。一方、精組A B類反切は見_B組下字をとることが少ないが、来母A B類反切は見_B組下字をとることがやや多く、B類への親近性を若干示している。然しながら、莊組A B類反切では章組下字が少なく、見_B組下字が多く、莊組はこの意味でB類的性格を示すのに比較すると、来母はやはり中間的だと言わねばならない。」(29頁)

・「知組A B類反切の下字声母分布を見ると、見_B組下字の百分率の少ないのが来母A B類反切の場合と異なっているが、これは知組A B類反切が来母下字をとりうるためと解釈され、この点からも知組は来母に近い性質を有したと見てよい。来母下字の百分率の高さでは知組A B類反切は莊組A B類反切に近いが、知組A B類反切は見_B組下字の百分率が低い点で莊組A B類反切とは異なり、そこにも知組の中間的性質が窺われる。」(29-30頁)

中村：たしかに中間的としていますね。ところで、重紐被切字の来母・知組下字の総合計に対するそれぞれの来母・知組下字の百分率を確認したいですね。これは平山氏の表2とはまとめ方が異なり森博達(1983)と同様となりますが。

吉池：表2の資料に依ると次の通りです。

表3. 来母・知組下字の百分率と実数()

被切字 \ 下字	来母	知組
幫 _A 組	25(12)	6(1)
見 _A 組	8(4)	13(2)
合計	33(16)	19(3)
幫 _B 組	10(5)	6(1)
見 _B 組	57(28)	75(12)
合計	67(33)	81(13)
総合計	100(49)	100(16)

知組・来母下字はB類に多く使用される傾向があることは明らかです。問題は、A類に使用される来母下字の33%と知組下字の19%をどのように見るかということです。

中村：森博達(1983)は、A類に使用される来母下字と知組下字を例外として切り捨て、来母と知組をB類と見る。平山久雄(1991)は、A類に使用される来母下字の33%と知組下字

の 19%を有意味なものとして、来母と知組をA類とB類の間と見る。森氏は完本王韻を、平山氏は上田氏の想定する原本切韻を資料とするので土俵が異なりますが、傾向を見るならば大きな違いは無いでしょう。

吉池：平山氏のように来母と知組を中間とした場合、なぜ来母の 67%がB類となり、知組の 81%がB類となるのか、なぜB類に傾くのか、このことが謎として残ってしまいます。森博達(1983)のように来母と知組をB類とすると、この謎は解消します。したがって私はB類説に賛成です。ただ例外が 33%と 19%というのは多すぎる気がします。

4 種類の介音

吉池：平山久雄（1991）は音声的に 4 種類の介音を設定することで、被切字の声母と舌音（来母と知組）との結びつきの偏りを説明しようとしています。ただし、重紐A B類の反切下字として舌音が多いという傾向の説明には成功していないように見えます。

[-i-]：見_A組・章組・精組

[-i-]：幫_A組・来母・知組

[-i-]：見_B組

[-i-]：幫_B組・莊組

中村：よくできたモデルです。来母・知組が、幫_A組と見_B組に音声的に近く、見_A組と幫_B組からは音声的に遠いということを比較的よく説明しています。

吉池：このモデルだと来母・知組はどちらかというA類的ということになりますね。

中村：平山氏は、来母は幫_A組と見_B組に音声的に近く、幫_B組と見_A組とは音声的にやや遠かったとします。来母との近さを表わす反切の百分率を見ると、見_B組よりも幫_A組のほうが大きいため、幫_A組と同じ段に置いたのでしょう。また平山久雄（1991）の 7.2 節と 7.3 節にあるように、来母・知組は広韻の分韻において重紐A類と同じ側となります。すなわち、清昔韻は幫_A組・見_A組・章組・精組・来母・知組の小韻からなり、庚陌韻は幫_B組・見_B組・莊組の小韻から成る。来母・知組は重紐A類の側にあるわけです。また、真質韻は、開口・見_B組合口・莊組合口の小韻からなり、諄術韻はそれ以外の合口小韻すなわち声母が見_A組・章組・精組・来母・知組の合口小韻から成る。やはり来母・知組は重紐A類の側にあるわけです。これらを鑑みて来母・知組を幫_A組の近くに配したと想像します。

このモデルの問題は、見_A組・章組・精組の介音を強介音[-i-]とする音声学的な根拠です。

吉池：次の箇所ですね。

「見_A組の介音が[-i-]であるのは、口蓋化声母の同化によると見ることができる。見_A組声母の調音点は口蓋化によって硬口蓋の中程近くにまで前進していたであろう。とすれば、それに後続する介音は前舌面が硬口蓋に接近して[-i-]となる筈である。」（32 頁）

中村：これは、重紐の音韻論的な区別が声母の口蓋化と非口蓋化の違いにあるとの前提に立った“音声学的”説明です。重紐の区別が声母の違いだとするからには、反切によって、とくに反切上字によって論証する必要がありますが、それは為されていません。

吉池：その点は前回議論した三根谷徹(1953)の三根谷説 (/k:kj/等)と同様です。三根谷氏は廣韻の 69 の重紐のペアによって議論し、平山氏は上田氏の想定する原本切韻によって議論するので、資料の土俵は異なります。しかし、反切上字の議論においては、廣韻の 69 例によっても有効と判断し得るので、前回の議論の一部を繰り返して重紐の別を声母の違いに求めることの非を確認したいと思います。

三根谷説が成り立たないことの確認

中村：廣韻の中の重紐例として有坂秀世(1937-1939)は 69 対を挙げましたが、その中には反切上字に A 類・B 類ともに同じ字が使われる例が多くあります。支韻並母の「陣 符支切」（A 類）と「皮 符羈切」（B 類）や脂韻群母合口の「葵 渠追切」（A 類）と「遠 渠追切」（B 類）などです。69 対のうち、実に 23 対において共通の反切上字が使われています。

重紐の対の三分の一に於いて同じ反切上字を使用するとすると、重紐を声母の違いとするわけにはいきません。反切の作成者および切韻の編纂者が A 類・B 類の声母を異なるものとは感じていなかったことを示しています。

吉池：三根谷説 (/k:kj/等)に立つと、C 類上字を持つ場合には、反切上字ではなく、反切下字によって声母の違いを表わしたことになります。事実三根谷徹(1953)はそのように述べます。しかしこのような想定は反切の原則から外れます。“仮に”、反切の原則を無視した反切の用字法を認めたとしても以下の例は説明に窮します。

A 類被切字の反切のうち、C 類上字と歯音 4 等（歯頭音）の下字を用いるものが 8 例あります。歯音 4 等の中古音は、ふつう [tsi-, tshi-, si-, zi-] であり、声母は口蓋化していないとされます。口蓋化していない破擦音や摩擦音の反切下字が、口蓋化した被切字の唇牙喉音を表わすというのは、道理の上で説明するのは困難です。

- (5) 臻（居隋切） 隋は邪母 4 等
- (6) 闕（去随切） 随は邪母 4 等
- (18) 縊（於賜切） 賜は心母 4 等
- (33) 藝（魚祭切） 祭は精母 4 等
- (43) 一（於悉切） 悉は心母 4 等

- (55) 標 (方小切) 小は心母 4 等
(58) 闐 (於小切) 小は心母 4 等
(61) 怵 (去秋切) 秋は清母 4 等

中村：平山久雄（1991）は「精組の介音が[-i-]であるのは，非口蓋化（実際には細介音の同化により弱口蓋化）破擦音・摩擦音の調音において舌端が歯茎の辺りに接近し，それに伴い前舌面全体も高い位置をとるためである。但し精組の介音は見_A組・章組の場合に比べては前舌面の位置が多少低かったであろう。」（32 頁）とします。

吉池：「舌端が歯茎の辺りに接近し，それに伴い前舌面全体も高い位置をとる」と言い切る理由が、わたしには分かりません。むしろ、口蓋化した章組と紛らわしくなることを避けるため精組の口蓋化の傾向は避けられる見たほうが良いのではないのでしょうか。

中村：いずれにしても、同音の反切上字を使用する重紐被切字が多数あることは事実であり、そうであるならば重紐を声母の違いとして説明することは困難です。

吉池：舌音中間説に立つと、舌音反切下字の多くがB類であるという事実を説明することができません。そこで私は、ひとまず森博達(1983)の舌音B類説を受け入れ、多くの例外をどのように処理するか、という方向に議論を進めた方が良いのではないかと考えています。

それはそれとして、次に中村雅之(1992)の舌音A類説を検討しましょう。

4. 中村雅之(1992)

吉池：中村雅之(1992)は、重紐の別は介音の違いによるという前提に立って、反切上字の介音を採用するか、反切下字の介音を採用するかは一定していない、つまり選択の“ゆれ”があったと認めることにより、例外のように見える反切は“全て”説明することができるものですね。

中村：そうです。私の推論はごく単純なものです。重紐の反切においては、A類にもB類にも用いられる反切下字が存在します。「義、小、沼、利、延、鄰、脂、列」などです。もしも介音が反切下字のみによって示されると考えるならば、これらの例によって、A類とB類が同じ介音を持っていたと想定せざるを得ないこととなります。しかし、それは重紐の区別が介音の違いによるという前提に抵触します。したがって、重紐介音は時に反切上字によって表される場合もあるということを認めざるを得ません。“反切の口唱”によって音を求める際に、介音を上字に求めるか、下字に求めるかに“ゆれ”があったというのは、反切の状況を見れば、当然の帰結だと思います。

吉池：“ゆれ”の具体例を示してもらえませんか。

中村：上田正(1975)で原本切韻と推定されている反切からいくつか例を拾ってみると、以下の通りです。

眞韻並母A類 避(婢義反)

眞韻並母B類 髮(皮義反)

小韻幫母A類 表(方小反)

小韻群母B類 驕(巨小反)

眞韻影母A類 因(於鄰反)

眞韻見母B類 巾(居鄰反)

脂韻影母A類 伊(於脂反)

脂韻見母B類 飢(居脂反)

義・小・鄰・脂がA類とB類双方の反切下字になっています。もしも介音が反切下字のみで表されていると想定すると、A類とB類の介音が同じであったこととなります。重紐の区別が介音の違いにあったという有坂・河野説を受け入れる限り、それぞれのペアの少なくとも一方は反切上字が介音を表していると考えなければ説明が付きません。

吉池：なるほど。この例は反切上字で介音の別を表わしたと考えざるを得ませんね。ところで、舌音(来_三・舌_三)の介音はどのように考えるのでしょうか。その舌音の介音と、反切の“ゆれ”とはどのような関係にあるのでしょうか。

中村：舌音(来_三・舌_三)はA類相当の介音を持っていたと考えます。上に挙げた例で、鄰は来母ですが、もしもこれがB類相当の介音を持っていたとすれば、上字がC類で下字がB類となり、どちらもゆるんだ介音ですから、なぜ因(於鄰反)がA類を導くのか説明できません。C+来_三がA類とB類の両方に用いられる状況を説明するためには、上字と下字の介音が異なっている必要があります。つまり、C類がB類と同じ介音を持っていたとすれば、来_三はA類相当の介音を持っていたこととなります。巾(居鄰反)のように、B類に用いられる時には、反切上字がB類と同じ介音を持っていたので、反切口唱においては上字の介音を用いたということになります。これは舌_三においても同様です。A類音節において、反切がC+舌_三となっているものは3例あります。

眞韻溪母A類 企(去智反)

笑韻溪母A類 趨(丘召反)

笑韻疑母A類 駟(牛召反)⁶

⁶ 上田正(1975)は駟をB類とする。森博達(1983)はA類とするので今それに従う。韻鏡では4等にあるが、疑母の駟と溪母の趨の位置が入れ替わっている。

3例とも反切上字はC類で、下字は舌音三等（智は知母、召は澄母）です。この場合、いずれも下字がA類介音を表していると考えられることになります。もしも森氏のように、舌音（来_三・舌_三）にB類相当の介音を想定してしまうと、C+舌音（来_三・舌_三）全43例のうち、11例⁷がA類を導く理由を全く説明できないことになります。C類の上字とB類の下字からどのようにしてA類の音節を導くのでしょうか。

吉池：中村さんは「C類がB類と同じ介音を持っていたとすれば」と、敢えてあいまいな表現をしている。そのように見えます。C類の介音がどのようなものであったかが反切口唱における“ゆれ”説の胆になるので、その点について明らかにする必要があります。

中村：C類がB類と同じ介音を持っていたというのは、次のような状況を考慮しての想定です。まず、①韻鏡においてC類がB類と同じく3等に置かれること。次に、②同撰内にB類とC類がある場合、唐代にそれらが合流することです（欣C=真B、元C=仙Bなど）。これらを説明するには、C類の介音がB類と同じであったと考えるのが都合がよいのです。

吉池：C類介音=B類介音の論拠として、この二点で十分なような気がしますが、何か不都合な点はあるのでしょうか。

中村：不都合は特にはないのですが、厳密さを求めるならば、①についてはもう少し説明が必要かも知れません。単に韻図の3等に置かれるというだけならば、齒音3等（章組）も同じ条件ですが、ほとんどの研究者は章組をA類と同等に扱います。唇牙喉音のC類をB類と同じに扱うのに、同じく3等にある章組の方はA類と同じだというのは、一見矛盾しています。この謎に対する解答は三根谷徹(1953)の中にあります。三根谷氏の解釈を私のことばで説明すると、次のようになります。

隋代に舌面音だった章組は現代北京語ではそり舌音になっている訳ですが、唐代後期には徐々に調音点に変化が生じ [tʃ] のような舌葉音になっていた。それに連動して、続く介音も前舌音から中舌的な介音に変化し、そのために韻図では3等に置かれることになった。そのように考えると、唐末の状況を反映すると見られる36字母で、2等の莊組と3等の章組が区別されずに「照、穿、牀、審、禪」とされることも納得できる。隋代のそり舌音（莊組）と舌面音（章組）では同じ声母と認識することにためらいを覚えるが、唐代後期にそり舌音（莊組、直音化している）と舌葉音（章組）だったと考えれば、同じ声母とすることも不自然ではない。

⁷ これは完本王韻を対象とした森博達(1983)によった数である。上田正(1975)で原本切韻と推定されている反切によると、上に挙げたC+舌_三の3例の他に、以下のC+来_三の10例が該当する。牝（扶履反）、葵（居誅反）、篇（芳連反）、便（房連反）、綿（武連反）、因（於鄰反）、頻（符鄰反）、子（去列反）、滅（亡列反）、鑿（扶列反）。

吉池：C類は三等と四等の区別の無い三等だけの唇牙喉音であり、韻図の三等に置かれるということだけでB類介音と同じだとすることにはためらいがあるということですね。そうすると、C類介音=B類介音の主な論拠は、先に挙げた②の「同撰内にB類とC類がある場合、唐代にそれらが合流すること（欣C=真B、元C=仙Bなど）」と言えそうです。「唐代にそれらが合流する」とは、唐代において、同撰内のB類とC類の主母音が同じになり、その結果両類は合流した（欣C=真B、元C=仙Bなど）と理解できます。合流するからには主母音も介音も同音であったということですね。そのような韻の合流について、言及した文献は有るのでしょうか。また、合流を明示する反切の具体例を知りたいところです。

中村：唐代における、同撰内でのC類>B類、および直音4等>A類の状況は、慧琳音義に反映されると一般に言われています。平山久雄(1967)にも言及があります⁸。C類の元韻「言」が呉音で「ゴン」であるのに対して、漢音で「ゲン」となるのも元韻C類>仙韻B類の反映なのでしょう。

吉池：以上を要するに、「C類介音=B類介音」および「舌音介音A類」の2点を認めるならば、反切の“ゆれ”説が成り立つということですね。理屈はわかりました。理屈はわかったのですが、“具体的に”にどのような反切の口唱によって、A類の音とB類の音を求めるのでしょうか。

反切の口唱法と介音選択の“ゆれ”

中村：では、さきほど挙げた例の中から次のペアを利用して、具体的に見てみましょう。

小韻幫母A類 表（方小反）

小韻群母B類 驕（巨小反）

⁸ 平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書1 言語』大修館書店。「C類韻母は同撰内のB類韻母に合流した。例えば欣韻 iǎn>真韻 iĕn（臻撰），元韻 ian>仙韻 ien（山撰）。同撰内にB類韻母がないときはそのまま残った。・・・（合流の方向については議論の余地がある。いま仮に上記の如き方向と考えてのことである。）」159頁。

C類韻母とB類韻母の合流について、その一部を、上田 正『慧琳反切總覽』（汲古書院、1987年）により提示すると次の通り。平声21欣韻の見母被切字「筋」はC類でその反切は「謹欣、謹銀、謹殷、居銀、居殷、薑銀」の六種。この内、「謹銀、居銀、薑銀」の「銀」は真韻B類。入声9迄の見母被切字「吃」（広韻の小韻代表字は「訖」）はC類でその反切は「斤乙、斤亿、斤乞、謹乙」の四種。この内、「斤乙、謹乙」の「乙」は質韻B類。平声17真韻の疑母被切字「嚚」（広韻の小韻代表字は「銀」）はB類でその反切は「魚巾。語斤、魚斤」の三種。このうち、「語斤、魚斤」の「斤」は欣韻C類。

直音も興味深い。平声21欣韻の疑母被切字「斷、所」（広韻の小韻代表字は「虢」）「狃」（集韻によると「狃」の異体字。小韻代表字は「虢」）はC類でその直音音注は共に「銀」で真韻B類。平声17真韻の見母被切字「巾」はB類でその直音音注は「斤」で欣韻C類。

どちらもC類上字+歯音4等です。平山久雄(1967)によって中古音の音価を示すと、次の通りです。

表 [bieu] (方 [pɪaŋ] +小 [sieu])

驕 [bieu] (巨 [gɪə] +小 [sieu])

反切をどのように口唱したかについては、いくつかの考え方があります⁹。私は反切上字の声母を下字の声母に代入することによって双声語を作り出す方法が用いられたと考えています。

吉池：“双声語”を作り出す、ですか……。まずA類の被切字を求めてみてください。

中村：具体的には「方小」を [pɪaŋ sieu] と読んだ後に、それを [pɪaŋ pieu] という双声語に作り変えます。そこで新たに生まれた [pieu] が求める被切字「表」の発音になります。一見、分かりにくいと思われるかも知れませんが、六朝時代の“反語”の流行、そして広韻巻末に掲載された「双声疊韻法」を読み解くと、初期の反切口唱法はそのような双声法（声母代入式口唱法）であったと考えるのが最も妥当です。

吉池：A類の方小反： [pɪaŋ sieu] → [pɪaŋ pieu] (⇒表 [pieu]) の場合には下字の介音がそのまま利用されるので違和感はありません。次にB類の被切字を求めてください。

中村：B類の驕（巨小反）の場合には、上字の介音を採用しないと求める音が生成されません。つまり、 [gɪə sieu] → [gɪə gɪeu] として驕の音 [gɪeu] を求めることになります。この場合は巨の声母だけでなく介音も下字に代入されます。実践してみると分かりますが、声母を下字に代入する際に介音も同時に代入するのはさほど不自然ではありません。

吉池：その方法だと、上字と下字の介音が異なる場合、どちらの介音を採用するかは読み手に任されている。別の言葉で言えば、反切の読み手は、「表」という字はA類の音を持ち、「驕」という字はB類の音を持つ、ということを事前に知っていなければなりませんね。

中村：その通りです。方小反や巨小反という反切からだけでは求める音は一義的には決まりません。その意味では、前に吉池さんが言っていたように、反切はすでに知っている被切字の音を確認するためのものだということになります。

吉池：韻書、少なくとも原本切韻を使用する文人は、重紐を含めて全ての被切字の音について事前に知っていることが前提で反切が付されている。その既知の音について、双声語を作

⁹ 口唱法についての詳細は、中村雅之(2003)「古代反切の口唱法」『KOTONOHA』10を参照。

り出す口唱法で確認する。その確認において、重紐にあっては上字の介音によるか下字の介音に依るかを選択することになる、ということですね。

中村：原本切韻の反切をみると、そのように理解せざるを得ないということです。

吉池：舌音A類説は理屈の上では整合性がとれています。その意味でこの理屈を否定するのは困難です。しかし、舌音字が反切下字になった場合、被切字がB類となる反切の傾向は確かに存在し、それは舌音A類説と相反するものです。これをどのように説明するかが問題として残ります。また、そもそも原本切韻は、なぜ反切下字の介音のみによって重紐を表記しなかったのかが疑問として残ります。

三つの説

中村：これまで、森博達(1983)の舌音B類説、平山久雄(1991)の舌音中間説、中村雅之(1992)の舌音A類説を見ました。舌音B類説は、反切の傾向に反するところが少ない説ですがA類となる例外が多すぎるのが難点です。

舌音中間説は、重紐の別が声母の口蓋化と非口蓋化の別を前提とした説です。その前提が反切上字の検討により否定されるからには舌音中間説そのものが認められないということになります。

吉池：舌音A類説は、韻書の被切字の音を事前に知っていることを前提として反切上字もしくは反切下字の介音を選択するという考え方に立っています。この考え方は、これまでの被切字と反切の関係に対する一般的な理解からやや離れているので、理解を得るためには、この点を克服しなければならないという印象を受けました。

中村：私が舌音A類説に立つのは、反切を例外なく説明できることもあるのですが、それ以外にも、韻の分合に明確に舌音の性格が見えるからです。具体的には庚韻と清韻、そして真韻と諄韻ですが、これについては次回の対談で詳しく見たいと思います。

吉池：それでは、今回はここまでとしましょう。